

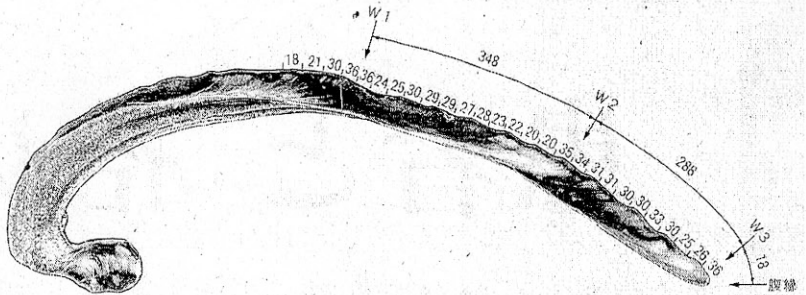
彼の死にかくされた謎。彼は死を本望と思ったのか、無念の死を遂げたのか。残された私たちには状況証拠から彼の最後を想像することしかできません。ですが、ひとつわかることがあります。彼がいっ死んだのか？！それを読み解く鍵は、彼の硬い体に刻まれたおびただしい線にありました。

彼の名はセタシジミ。体長約4寸、小ぶりのハマグリほどもある体は、いまわたしたちが目にする彼の同種にくらべ、桁外れに大きい。すでに漆黒の表皮は剥げ、白い地肌がむき出しになっています。中身はカラ。無残な姿になってわたしたちの祖先を支えてくれた尊い生命に感謝しながら、彼にメスを入れます。

二枚貝である彼の殻の片方を縦半分に切断。切り口はヤスリで滑らかに磨き上げ、そこに薬品を数滴垂らし、特殊なフィルムに写し取ります。そうして顕微鏡を覗き込むと、見つけました！彼の「ダイニング・メッセーじ」たる「成長線」。

これは、栗津湖底遺跡（滋賀県大津市）から見つかった貝塚の貝殻の話です。縄文時代、食料となることで、わたしたちの遠い祖先を助けてくれました。見つかった貝の9割以上はこのセタシジミでした。貝塚からは他に木の実や

貝の成長線



貝塚から見つかったセタシジミの貝殻断面。斜めに見える線が成長線（顕微鏡写真）

季節（採取季節）が推定されています。量（体積）的に大半を占める貝の死亡日、つまり採取日を知ることが縄文人の生業カレンダーを知ることになります。それにしても貝は年中湖にいて、四季を通じて採取できる、いたい、いつ採ったのか？そこで重要となるのが、セタシジミが持つ「成長線」です。

成長線は木の年輪のように、成長とともに貝殻に刻まれます。だからこの線を数えれば、死亡日がわかる——思うは易し。同じ二枚貝でもハマグリは成長線については先行研究が進んでいて、まさに数えればいい状態でしたが、セタシジミについては成長線についての実態が

ほとんどわかっておらず、まず「成長」がどのように殻にあらわれるのかを研究することからはじまりました。そしてようやく、成長線は1日1本殻に刻まれ、その間隔は寒いほど狭い、また、最も狭まるのは2月12日頃だということが判明しました。ここから端までの本数を数えれば死亡日——採取日がわかります。今度は、膨大な数の貝殻から、分析に適した個体を複数選び出し、1本ずつ線を数えます。じつと顕微鏡を覗きながら、左手に位置や焦点を合わせるネジ、右手にカウンター（パードウオッチング）でみかけるあの力チカチ）を持って格闘します。

「貝は春々夏に集中して採取していた。」言え一言、書けば一文ですが、こうした地道な取り組みによって得られた成果が縄文人の食生活を知る、大きな役割を担ったのです。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 中川治美）

縄文人の食生活知る鍵に